

「人類の良心となる人」に

千葉哲郎



与えられた論題は、私の考える「同志社の期待する人間像」である。

このような論題の趣旨については、同志社の歴史がはじまって以来、今日まで、実に多くの先人たちがくり返しくり返し説いてきたところであって、私がここで改めて申し開きをする筋合いのものではないことを私はよく知っている。

しかし、また同時に私は、どんなに賢い人も多かれ少なかれ健忘症的性質をもっているであって、この意味では何度も論じ改めることによって同志社の意味を問い、同志社を時々刻々に正して行かなければならない、ということも臍腑にしみじみと感じている。

したがって、私は僭越を承知の上で、与えられた論題に先づ素直に答えることから本論を展開しようと思う。そうすることが、とりも直さず、同志社人としての責任の一端を果たすことになる。

と考えるからだ。

*

私の考える「同志社の期待する人間像」は、要約すれば、創立者新島先生の問題を今の時代に生かすために一身を投げうつことの出来る人間である。つまり、新島精神の伝統を、生命をかけて、生きる人間だ。

同志社創立に至るまでの新島先生の歩みの中に先生の死が賭けられていたことを思えば、この表現の中には容易ならざるものが秘められていることに人は感づくだろう。

では、先生が死を賭けたのは何のためであったか。この一事の中に、私は新島精神の精髓をみようとする。

新島先生が国禁を犯して日本を脱走したのは、周知の通り、幕末の外交切迫し人心動揺の折であり、先生は愛国の志止みが

たく、他日国家のためにつくす人間になろうとしたためであった。そして、先生は、国家を救い民を救う場を教育の事業に求めたのだった。

アメリカに渡った新島先生（当時二十五歳）が、慶応二年（一八六六年）二月二十一日に父、新島民治に宛てた手紙は、脱走の動機を知る典拠として徳富蘇峰も認めるところであるが、この手紙を読むと、いかに国家のためにつくそうとする先生の決意が火と燃えるものであつたかがうかがえる。すなわち、

「……小子儀不肖と雖も、国家（に）一分の力を竭さんと存じ、……、生命に拘り候はん国禁をも恐れず、……全く国家の為に寸力を竭さんと存じ中、心燃るが如く遂に此挙に及び候。……」

（省略記号は筆者。以下同じ。）

と真情のほとばしりを伝えている。また、「同志社大学設立の旨意」を新聞・雑誌に公表した翌年にあたる明治二十二年（一八八九年）十一月二日、新島先生（当時四十七歳）が古賀鶴次郎（同志社英学普通科五年生）に宛てた返信には、次のようにしたためられている。

「……我が同志社の青年中、我が邦の前途を憂ふる事貴君の如き者、数輩を見るに至らば、頗る信す、我が校の設立は我が邦家に対し、決して無効のものたらざるを。……仰ぎ願はくは、益々千里の志を養ひ、我が邦家を救ふの大計を立て賜へ。富貴功名なものぞ。願ふ所は偏へに此の民を救ひ、此の民を民き、一日も早く真の文化の域に達し、ゴールデン・エイジ（Golden Age）の極点に至らしめん事なり。願はくは日々鏡を養ひ、胆

を練り、此の大事に当るの準備をなし賜はゞ、生の喜び争でかこれに如くものあらん。今や満天下腐敗せり。これが為めに涙を灑ぐもの幾人かある。君等宜しく改革家となりて、此不潔なる天下を一掃し賜へ。決して名利に汲々たる軽薄児の轍を踏み賜ふなかれ。……」

ここに、私たちは、礼をつくして一学生に伝えた、日本の国家及び人民を救う大計を読みとるのである。

この手紙をしたためた翌年、新島先生は永眠されたのだが、「……才縦之済民策、尚抱壯図、迎春」の詩がうたわれたのは、この最後の正月だったということを私たちは忘れてはならない。

このように、新島先生の生涯に一貫して流れているものは、憂国済民の精神であり、これこそ新島精神の精髓である。この精神は、武士の精神を下地とするキリスト教の精神から発したものだ。

先生の有名な言葉、「私のために祈るよりは、日本のために祈れ」はまさにこのような新島精神の凝縮的表現と言わなければならぬ。

私は、この教えの言葉は、時代を越えて今日にもまさしく生きていると思う。しかし、宇宙時代を迎えようとしている今日、人々の間に、この言葉は何の抵抗もなく受け容れられるだろうか、という疑念が私の心に残る。その中でも最も大きいものは、人類のために祈らなければならない状況についてである。この疑念の内に、私は、新島先生が生きた時代と今日の私たちの時代との間

の大きなへだたりを感じるとともに、新島先生が私たちに託した願いに對する新たな自覚を感じざるを得ない。

新島先生の願いを、先生亡きあとの今日の時代にどう生かすか。この問題は、あらゆる同志社人に課せられた課題である。

新島精神をどう現代に生かすかについて、徳富蘇峰は次のように説く。

「先生の継承者は只だ先生の精神を体得せば可。その作用の如きは、須らく時勢と与に変化せねばならぬ。……其の形跡に模倣せず、其の精神を紹述して、更らに之を新たな時態に適應せしめねばならぬ。此れが能く創立者の志を成す所以であろう。」

*

また、住谷悦治同志社総長も、「学生諸君に語る」という小冊子の中で、「新時代の要請に應ずる新鮮な氣風を振興」する必要を、さまざまな角度から説いておられる。

核時代にあつて人類滅亡の危機が叫ばれ、道は遠くも世界が一つにならうと接近している今日、私は、新島先生の言葉は、「私のために祈るよりは、日本のために祈れ日本のために祈るよりは人類のために祈れ」と言い改められるべきではないか、と思う。

私たちは、このような祈りを通して、人類の平和共存のために努力しなければならぬのだ。すでに、多くの同志社人が、それぞれの立場で、この目的達成のために奮励しているのは喜ばしい。

学内をみて、田畑忍法学部教授の平和憲法擁護と日本永世中立国化の運動、鶴見俊輔教授のクベトナムに平和をク運動の一環

としての国際脱走者の保護運動、等をはじめ、さまざまなすぐれた努力がなされている。

また、学内外を問はず、広く宗教界、実業界、教育界、政界、社会事業界、ジャーナリズム界に、その他さまざまな分野において、新しい歴史を切り開く努力がなされている。必ずしも目立たなくとも、それぞれの日々の生活の場において、身近かなところから少しでも世を明るくするための大なり小なりの努力を重ねている人々がある。

このように、立場はどんなものであれ、普遍的人間愛の実践行為であれば、同心円の広がりをもって、人類の平和共存への道につながるのだ。

かくて、私たちは、『同志社大学設立の旨意』にうたわれた「一國の良心とも謂ふべき人々」は「人類の良心となる人々」でなければならず、そのように人類の良心となる人々は、高い目標をかかげて人類の平和共存のために闘う人々であると共に、身近かな大衆社会における隣人愛の実践者でなければならない、ということに思い至る。

私は、崇高な大精神を持ち得る人は、また大衆の中の人間を愛することが出来る人だと思ふ。新島先生における「救国済民」の精神と「五平さん」主義の共存は、まさにこのいい例だろう。

もともと、同志社大学の設立には、リンカーンの説く「人民の、人民による、人民のための政治」という民主主義理念を教育の場で実践しようとする意図がはたらいていた、と私は考えている。

「設立の旨意」からも、また、新島先生(当時二十三歳)がボストン

に着いた一八六五年はリンカーン大統領が暗殺された年であったことから、うかがえる。二十三歳の血気ある青年新島が、リンカーンの死に深く感ずるところがなかったとは言えないだろう。

とすれば、リンカーンの終わったところに新島が始まったわけで、自由・平等の精神に立脚するリンカーンの思想はより練磨されて同志社に流れている筈である。

ところが、現状はどうか。

「樹えよ人を輝け自由」と大学歌にくり返したわれているが、空念仏となつてはおらぬか。良心の充滿した人間を痛めつけようとする時代錯誤の封建的病理集団はないか。学生を営利事業の道具として扱ふ危険性はないか。新島先生を偽りの看板と化していないか。キリスト者は真に愛に満ちた人間であるか。利己的争いに身をやつす害虫的人間がおらぬか。そして、何よりも、真に憲法の精神を生きる人が、どれだけの数にのぼるか。

私たちは、すばらしい伝統をもつた学園であるが故に、この同志社をよりよくするために厳しく自戒しなければならぬ。

最近の諸大学の紛争はさまざまな原因によるのだが、他に責任を帰す前に、私たちは、新島先生の自戒の鞭を自らに加える必要がないだろうか。

今日の時勢は、作家の武田泰淳氏に言わせれば、「どう見ても、進歩的な人々の中には、大学の教師はいかにはかで、無力であり、大学は悪の巣くつだと思ふ者が出てきた。」という具合であり、また、東大改革準備調査会専門委の報告をみても、「教授会に対し独善、無責任、無能力、秘密主義などの非難が大学の内外から

浴びせられるにいたつたのである。」という事態がある。

私たちの同志社には、これらの表現をもって非難されるべき要素が極めて少ないのを幸いとすのだが、全くないとも言えないのである。人ごととしてはいけない。

このような時勢の中で、同志社人のすべてが同志社立学の精神に帰つて改革に努めなければならないことは言うまでもないが、先づ、教師たる者が、新島先生の自戒の鞭の精神で自己改革に刻苦勉強することが何より急務であらう。

先づ、内部改革を整備し、みんなが同志社人であることを幸福に思ふような学園をつくり、この段階を経て日本国民を、そして世界の人民を幸福にするための献身的努力を同志社人がこぞ、つて、続けて行かなければならない。このような任務を、さまざまな場面で実践する人をこそ、同志社は今、求めている。

考え、行動するのだ。腐敗し、混迷にあえぐ日本を、世界を救うために。日本がベトナムやチェコの悲劇に陥らないと誰が断言出来ようか。また、人類破壊が現実化しないと誰が保障しようか。私たちは、このような疑惑を晴らす道を進まなければならないのだ。

この道は、あるいは日本の永世中立化により、世界に平和の波紋を投げかけることによつて開かれるかも知れない。同時に、ヒロシマに国連本部を置き、国連を強化拡大することによつて開かれるかも知れない。

何れにせよ、道は遠い。しかし、私たちの、世界の人々の、心次第では近いのだ。そう私は信じている。

(文学部専任講師)

個人の創造・建設を

奥田 聡



同志社らしからぬということ

先般同志社のある卒業生の結婚式に招かれ、その卒業生の勤務先の会社の会長、社長はじめ直属の上司の人々の祝辞の中に「同君が会社の原動力としていかに積極的に仕事を推進しているか」の賞め言葉があり、これはおめでたい席上の慣例として特に気にもとめなかったのであるが、その祝詞の方々に「同君は同志社らしからぬ人物である」という言葉に遭遇したことがある。この言葉には私も大いに異議を唱える必要を認め、特に発言を求めて、「彼こそ最も同志社らしい同志社卒業生である」ことを力説し、「さらに言及すれば、真の同志社マンの精神的なバックボーンを彼を通して見て頂きたい」とも付け加えたのであった。

一般に、社会が同志社人を見る目には、官立と異なった私立大学の華美、軽佻な面のみが映るようで、そこで教育されたものは国立大学を卒業してきたものより、学術の面でも、人物の面でも相当に劣ることが、一般的な定評になっており、そのような範疇

から離れていた同君が「同志社らしからぬ」という評判をかち得たものと思われる。私学の学生に軽佻浮薄な気風が一般にあり、本学の学生のかんりの層がその気風のもとに葦のようにそよいでいることは、いまさら否定することもないと思うが、ここで述べたいことはその中に存在する別の同志社人の強固な意志、類まれなる教育的沃土についてである。これが同志社のどこから生まれてきたかについてはよく考えてみる必要があるように思う。

共に学び、共に教わること

時々他大学の教官、または会社の方が研究室を見学されることが工学部の場合には多い。昨春秋、来訪されたある会社の幹部の方が次のような感概を洩らされたのである。「先生の研究室を訪ねるべく、道順を尋ねたのであるが、まず校門を入ったところの受付けがよい。また途中で二度ほど聞いた人の応対がすばらしい。そして研究室に入って学生の真摯な実験態度をみて、これがあのゲバ棒を振るっている若人と同年輩の若人の姿であろうか、日本

にまだこんなすばらしい場所があるとは思わなかった。自分の会社にいる同志社卒業生のすばらしさの原因がやっと理解できたように思う。」とべたほめの状態で帰ってゆかれた。また研究室を案内されたほとんどの大学の教官から工学部学生の研究室における礼儀正しさを指摘されている。これらはひいき目が八十パーセントとしても同志社の何かによるよさが表われたものと自負することができると思う。筆者自身他の二、三の国公立の大学の講義も担当しているところから、他大学の学生と比較も容易にできるが、何が真にこの好結果の原因となっているかについては、さらに検討してみる必要があると思っている。

さてこれらの事例にはすでに、同志社の期待される自然的人間像が浮き彫りされているように思うが、いま少しく筆者の考える作爲的人間像について述べてみたい。

教育の本道が教授することにあるのではなく、教師と学生との個人的接触と学生の自主的勉強により教育が達成されることに異論はないと思うが、よく交わる者ほどよく教育され、教えることとは教わることであるを人間形成の場としての大学における教育として特に気をつけなければならぬと思う。もちろん一定の形の定った人間像を作り上げるのではなく、個人個人が独特の他人にないものをいかにして創造していくかということである。同志社という場がいかにこの個人の創造・建設に与って力があるかがこの場合問題になると思う。個人の創造があつてはじめて、個人独自のものが生まれるわけで、これなくしては他人へのサービス、社会へのサービス、人類福祉へのサービスも空文に終わるもので

ある。自己が他人にない何かを持っていてる時にこそはじめて他人にそれを分け与えることができるのであつて、空手の空念仏で他人へのサービスなどいう場合は思い上がりもはなはだしいものといわねばならない。

しからは、いかにして個人独自のものを築き上げるかが問題になるが、これには全く真剣な現実との対決が必要と思われる。学術の研究も学生の勉強も、生命をかけた一大事であり、かりそめにもアクセサリ的な勉強では困るのであるが、学生の勉強に対する、また人間形成に対する態度が近時の学風として曖昧であるのはいかがしたことであろうか。少なくとも新島先生の建学の頃はその教育も学生の勉強も厳しいものがあり、新島先生の自鞭の教えなどには身の引き締まるようなものがあり、その建設的意欲には並々ならぬものがあつたことを伺い知ることができるのであるが、いつの頃から、私学の水準は官学より低いものであり、それに甘んじ、学生はむしろ安易に、アクセサリ的な勉強をすることを私学の特長と誤認されるようになったことは誠に残念なことといわなければならない。戦後、学制の改革があり、特に最近は大衆化によつて官学と私学との実力の相違が無くなりつつあることはよいことと思うが、冒頭に述べたような世の誤つた同志社観を打破するには今こそ好機であるといえよう。筆者の所属する工学部では、教育はすべて学生の体得による面が多く、教員も学生も実験服で、汗と油とにまみれ、苦楽を共に分け合っている。共に学び、共に教わることの中から真の同志社人が育つものと確信し、実践につとめている。

良心こそ日本の礎

同志社におり、その期待する人間像として良心の充滿した人間像を想像することは、至極当然すぎると思われるが、ここでは科学する一教育者の立場から、また一日本人として、良心がいかに重要であるかを述べてみたいと思う。

良心は英語でいへば Conscience の言葉に示されるように科学 (science) に一致 (Con) するところである。科学とは合理性であり、無理のないもの、最も自然の理にかなったものである。科学とは自然な道であるから、最も平易なものであり、そのまた合理性の故に万人に受け入れられなければならないものである。科学的真理が一見難解であるように見えるのは、その因果関係がすじ道を通して平易に理解されないことによるものと思われる。横車を押し、また他人の足を引張るようなことをすることは良心のある人のなきないところであるが、これはまた自然の理にも背くものといわねばならないと思う。

東洋諸国は風土より考えて、合理性の育ちが遅く、産業革命以来の近代化にも遅れをとったことは興味ある問題であるが、ここではこれについて述べる暇がないので割愛する。日本では未だに真の意味の合理性をはき違えて、むしろ非合理性の方を尊ぶ気風があることはまことに奇異なことである。特に政治には良心 (科学性) 以前のものが、いわゆる政治力として大手をふるって通用しており、また世の中もそれを当然のように考え、甚しきは鉄道がどこを通り、橋がどこにかかるかは技術を無視して、非科学性

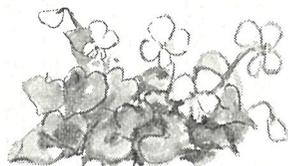
(非良心) の首の振り方にかかっている等、工学者にとつても頭の痛い日本の前近代の姿が方々に見られる。

戦後、日本の道徳的基盤は完全に崩壊し、二十数年経った今日においても、未だに日本人の心は宙に浮いているが、そろそろこのあたりで、日本人は心をと戻してもよいのではないかと考える。西洋においてはキリスト教の、また中近東では回教の、そして東南アジア諸国には仏教の根強い道徳的な規制があり、またその文化も現在においてもこれらの宗教に支えられるところが極めて大きい。例えば筆者の専門とする化学機械装置およびその他の工業分野においても、例を欧州にとるならば、その特徴として、合理性と常に完全性と耐久性が要求されており、この合理性と人間性はまた社会繁栄のための不可欠の要素であると堅く信じられており、宗教的伝統と相まって欧州人の社会人としての人格は近時の日本人をはるかにしのいでいるように思われる。

このような人間性の目覚めも乏しい、宗教性にも薄い我国に、はたして道徳の基準となりうるものがあるかと考えたとき、筆者には期せずして新島先生の「良心」こそ幾度の戦争にもその価値を変えぬ、世界のすべての人にアピールすることのできる大思想ではないかと思いつたわけである。幸にして日本の教育水準は数の上では世界中で最も高く、日本人は戦後世界では最も自由な(時には放縦な)教育を受けていることから考えて、それから得られ、世界中に通用できる理念は「話せばわかる」対話の精神であり、正しいもの、自然なもの、合理的なものを尊ぶ精神ではないかと考えられる。全ての宗教の国を通じて(三五頁下段へ)

建学の初心に帰ろう

小野 則秋



ヘルメットをかぶってケバ棒を振りまわし、人を傷つけても罪悪と感ぜぬ無頼漢も一つの人間像であるならば、日曜毎の教会の礼拝堂に静かな黙禱の一刻に心の安らぎを感じる勤厳真摯な信者の姿も一つの具体的人間像である。人間一人一人がその生誕を異にし、その置かれた環境、遺伝的素質、教育などによってさまざまの人間が形成され、百人が百人、千人が千人、皆それぞれにちがった人間がつくり上げられていくが、その形成パターンとして描かれる人間共通に望ましい理想図を人間像というならば、人間形成を本務とする教育機関として、その教育目標としてはっきりした人間像を持たぬということはありません。

同志社の場合も同志社としての何等かの人間像がなくて教育するならばそれは全く教育を冒瀆するものといわなければならぬが、同志社には同志社としての教育の人間像が建学以来伝統として受けつがれている筈で、建学の精神の底に人間像は輝いている。

そのヴィジョンは果してどんなものであろうか。

同志社教育の眼目は一般的には抽象的に新島精神とか同志社精神、キリスト教主義、自由主義などと簡単に軽々しくいいはやされていくようであるが、しかしこれは莫とした概念であり、観念的な用語でこそあって具体的な人間像といえるものではない。これらの観念が具体的ヴィジョン、実際の映像となつてこそはじめて実感のある人間像が描かれるのである。同志社を志望して集まつてくる学生も、その父兄もまたひとしく何らかの自己の理想の人間像を描き、その形成を同志社に期待して同志社進学を選んでいくことには間違はあるまい。もちろんその期待するところは千差万別で人によってそのパターンは一人一人が異なるであろう。この各人各様におのおの異なる期待に対して同志社がいかなる人間像をもって答えるかが問題の焦点でなければならぬ。

同志社精神も新島精神も、キリスト教主義も、そのままでは内

容の莫とした名辞だけで人間像になる筈はない。それがいかなる実体をもつものであるか、それ等がまたいかなるつながりを持つものであるか、具体的に解明されてこそ同志社の人間像ははじめに明瞭にされるであろう。千種万様の期待にそれ等の精神や主義というものがどのような形で接触し作用し、どのように結びつき、どのような結果をもたらすべきかが予測され、また明確化されねばならぬ。端的にいうならば同志社教育の人間像は同志社の建学の精神を掘下げることにより、また創立者新島襄先生の言葉を謙虚に反芻する事によってはっきりと頭われてくるであろう。

新島先生は『同志社大学設立の旨意』の中にその同志社教育の人間像を具体的に打ちたてて

其の目的とする所は、独り普通の英学を教授するのみならず、其の徳性を涵養し、其品行を高尙ならしめ、其精神を正大ならしめんことを勉め、独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂良心を手腕に運用するの人物を出さんことを勉めたりき、而して斯くの如き教育は決して一方に偏したる智育にて達し得可き者に非ず、又既に人心を支配する能力を失いたる儒教主義の能くす可き所に非ず、唯だ上帝を信じ、真理を愛し、人情を敦くする基督教主義の道徳に存することを信じ、基督教主義を以て徳育の基本と為せり。

と述べているがこの言葉に表現されている内容こそ同志社に期待され、また同志社が世に答える同志社教育の人間像でなければならぬ。

同志社の人間像を更にせんじつめるならば「良心を手腕に運用

する」人間、即ち生活、行動の背景に常に良心を持ちつつけ、良心に従って行動すべき人物の育成こそが、同志社教育の眼目であり、ゲバ棒を振りまわすごとき学生が同志社教育の人間像であるか否かは前文に照しても自明のことであろう。新島先生は更に言葉をついで

勿論此の大学よりしては、或は政党に加入する者もあらん、或は農工商の業に従事する者もあらん、或は宗教の爲め働く者も可からずと雖も、是等の人々は皆一國の精神となり、元氣となり、柱石となる所の人々にして、即ち是等の人々を養成するは、実に同志社大学を設立する所以の目的ならん。

と叙述しているが、同志社教育の精神は一種の実学であり、実学の背景に良心を忘れず、「一國の良心ともなるべきで」、この良心の人の育成こそが同志社がもつ建学以来の伝統精神であり、新島先生の教育理念である。これを踏襲すべき現在の同志社人として忘れてならぬことは、現在ひそかに校門内に立ちつくして同志社人を朝夕送迎している良心碑の精神こそ同志社の志向する人間像であることを教員・職員・学生一人一人が銘記し、その人間像を彷彿するところにこそ同志社教育の人間像は着々と形成されるであろう。

新島先生がかかる人間像を描いていたればこそ、これに向つて学生生徒の育成に専念したればこそ、直接先生の薫陶を受けた先輩の中には政界、学界、宗教界、実業界に一國の良神となつて活躍し、近代日本の発展に参画してきた人物が同志社から多士済

濟として輩出しているのではあるまいか。今更一つ一つこの事実を挙げて例証しなくても同志社人のひとしくうなずけるであろう。更にまた新島先生は永眠の間際においてもなお同志社教育の将来をおもつてこのことを遺言して

同志社教育の目的は其神学・政治・文学等に従事するに拘らず、皆精神活力あり、真誠の自由を愛し以て邦家に益す可き人物を養成するを務む可き事。

同志社に於ては個儼不羈なる書生を圧束せず務めて其の本性に従ひ之を順道し以て天下の人物を養成す可き事。

と枕頭の徳富蘇峰に筆記させているが、ここにも同志社教育の人間像は極めて明確に語られている。しかしながら先生が永眠されて既に八〇年、時の経過と共にこの人間像も輪郭だけを残しつつその中身が薄れて、同志社は最近世間並の学園に墮して建学当初の精神を忘れつつあるのではあるまいかと懸念される。もし教員、職員がただ単に伝統の上に同志社精神とか新島精神などの観念的用語のみふりかざして、かりにも新島先生の教育に描いてきた人間像を消滅させる事があるとしたならば、それは直ちに現在の同志社を校舎のみの美観とその広大を誇るだけのむなしき形骸だけの同志社と転落しても、早新島先生の遺言も反古とひとしくなつてしまふであらう。

不安混迷の世の中であつて、今や同志社学園の中にも確固たる建学の理念が失なわれて行くのでないかという杞憂すら感じられる昨今、今こそ学園として一度リヴィヴァル運動を起して建学精神に帰り、同志社の人間像を再確認すべきの時ではあるまいか。

学園全体総ぐるみに建学の初心に帰るならば、理屈でなしにそこに本当の同志社の人間像が明視出来得ると信ずる。この人間像こそが同志社教育の真生命として同志社の日本の教育機関の中に占める座位が確固不動のものとなり、永遠のものとなるであらう。

同志社の発展は学生生徒数を徒らに増やすことでもなく、立派な校舎を建てて世に誇ることもない。学生生徒数が少なくても校舎が貧弱であっても建学当初から掲げてきた人間像の形成こそが本當の新島精神であり、同志社教育の道ではあるまいか。またそれこそが神の新島先生に課し同志社に与えた唯一の使命であらう。

(本部職員・社史々料編集所主任)

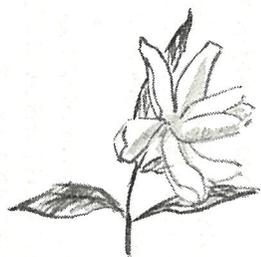
(三二頁から続く) 全世界の人間にアピールできる心を日本人がよりどころとすることができ、いま日本に課せられた最も大事なことはないかと考えるものである。良心こそこのような意味で同志社の期待する人間像の指標であるばかりでなく、日本の礎として、また世界に通用する指標として、われわれ同志人は大きい誇りをもって、さらに大きく掲げて前進する必要があるのではなからうか。明治のはじめにおいて、新島先生が同志社を興し、このような指標を残されたことに對し、いまさらながら感歎おく能わぬものである。

同志社の悪しきを直視し、良きを称揚して、けじめをつけていくことは同志社の良心および同志社の発展のためにせひとも必要などところで、大学の物質面での隆盛よりも、豊かな精神的興隆がいま一度なされんことを切に願うものである。

(工学部教授)

教育の巨匠・同志社が刻むもの

志賀英雄



同志社が期待する学生像とは何か。私が受けた十一年間の教育を回顧し、合わせて教師として三十数年の体験を反省しながら、与えられた課題について、幾分論理的に、私の考えをのべてみたい。

まず初めに、学生に期待する「同志社」とは何だろう。この主体性の概念を規定しておかなければならない。総長、理事長を初め、多くの教職員は学、校法人同志社の代表役員、構成員ではあるが、**教学、共同体**としての同志社の恒久的な代表者ではないし、またその象徴でもない。その唯一の象徴は新島襄である。しかし同志社は創立以来、九十数年間に著しい発展をとげ、その実体は新島が当初に構想していた同志社の理念を遙かに越える大きな教育体系を形成し、福沢諭吉の慶応義塾と共に、日本における最古にして最大のグループに属する私学の栄光を分かち合っている。したがって現在の同志社を支配している精神は、新島が意図していたものとはかなり違ったものになっていると思われる。特に同志

社大学においてはそうであろう。しかしこのことは、同志社が発展するための歴史的必然でもあろう。同志社は回想に生きるのではなく、栄光にみちた伝統を踏まえて、未来を切り開いてゆく老朽することのない**教学共同体**である。けれども**共同体**の発展には、それを支配する理念や原理がなければならぬ。同志社の場合、それは「同志社大学設立の旨意」の中に明記されている。この旨意書が同志社精神を支配する根本理念と、同志社教育の原理とを示すマグナ・カルタだと考える。

同志社の憲法とも言うべき「同志社通則」の第一章「綱領」（六カ条）は、このマグナ・カルタの条文的要約であって、「不易ニシテ決シテ動カスベカラズ」と記されているが、私はこの旨意書に告知されている理念を整理して、同志社の教育基本法が制定されることを望みたい。

ところが、ある人々は同志社精神などと言うものは、今では既に神話となってしまうと言う。しかし九十三年余の同志社の歴史の半は以上を、同志社の中に、同志社と共に生きてきた私

は、この唯一の精神は新しい時代と共に、新しい理念を生み加えながら、今日なお同志社の中に生き続けていると信ずる。なるほどこの精神の燈火は、時には消え絶えるかの如く大きく揺らいだこともあった。しかし絶対に消滅させてはならぬ。消滅は同志社の終末を意味するからである。ヘーゲル風に言うならば、同志社精神はわれわれにとって絶対的精神であり、イデオロギイなのである。私が考える学生に期待する同志社とは、この精神の実体であり、組織であって、期待する学生像とは、この絶対的精神の自覚に立って、同志社を極みまで愛しながら、自分の人間性の形成に勤む学生と言うことになる。しかしこの定義だけでは形式的に過ぎるだろう。そこで私は「旨意書」の中の最も重要な二、三の語句と、新島の語録の若干を手掛かりとして、「期待される学生像」について、いまま少し具体的に私の考えをのべてみよう。

二

同志社教育の目的は、単に西洋の学問の教授だけではなく、技能に勝れ品質の高い人物の育成にあるが、その目的原理は、「唯だ上席を信じ、真理を愛し、人情を教くする基督教主義の道徳に存することを信じ、基督教主義を以て徳育の基本と為せり。吾人が世の教育家と其趣を異にしたるもここに在り」と言う新島の宣言の中に簡潔に提示されている。すなわちこの原理的規定によると、同志社が学生に期待する第一のものは、「世界をその最も奥深いところで支配しているものが、何であるか。」(ゲーテの「フアウスト」)を探求し、それが神であるという発見的自覚に立つ

ことである。私自身が同志社中学において学びえた最高のものは、「新約聖書」の中に最も美しく啓示されている永遠の真理に導かれて得た神の實在の直観であり、最深のものは、「讃美歌」によって開眼された聖なる美への感動であった。このキリスト教の真理なしには、同志社精神の本質と教育の原理は成り立たない。しかし同志社はキリスト教の宣教を目的とするミッション・スクールではない。したがって学生や教師の「信教の自由」は尊重されている。けれどもキリスト教の真理を徳育の基本とする人格主義的教育の原理は、同志社の不易の校規であって、その否定は許されない。宗教的真理の否定は、いかなる思想の自由の下においても許されないからである。また宗教の真理が道徳的価値の根源であり、これが人格形成の根拠であることを思えば、新島が確立したこの教育の原理は絶対である。

それ故に同志社の学生は、手にする「聖書」を通じてキリスト教の真理にアプローチし、イエスが教えた愛の福音に生きることが、人間性と社会とをいかに深く美しくするか、と言うことを学んで欲しい。それと共に、「聖書」のいわば音楽的表現でもある「讃美歌」が、一曲でも多く歌える人であって欲しいと思う。「讃美歌」はその祈りにみちた歌詞と、清らかな旋律や和声をもって、人々の心情を浄化する。「明治の人」のカテゴリーに入る新島先生は、どうも「歌わぬ人」であつたらしい。しかし現代の学生は音楽センスが豊かである筈だから、「讃美歌」を聞き、また歌うことにより、美の門を通じて、真理の殿堂に至る道が開かれていることを発見することができるであらう。これは私自身の経験で

もある。真理を湛えた美の深さに感動する純粋な感情を、「讚美歌」によって育てて欲しい。そして同志社をいつも、どこかで美しい音楽の聞える美の学園であらしめたいと願う。私が「教育学演習」や学習指導などを自宅で行なう日に、日頃愛唱する讚美歌のレコードをかけて、皆と一緒に聞くのも、聖なる美の真理への誘いを考えてのことである。これは私の美的教育の一つの試みでもある。同志社の本質は、キリスト教を否認する者よりも、この世界宗教を理解しようとする自覚者の方が、その高くまた深い世界史的真理によって、人間性が愈々美しく陶冶されることを教えようとする宗教共同体なのである。

三

学生に期待する第二のものは、「真理を愛する」学問的精神である。学生の本分は学問的真理の探求である。学校は雑多な知識百貨店ではなく、系統的に真理を探求するアカデミックな精神をもって、多元的価値体系を追求する学問共同体である。この場所において、学生は教師と共に、真理愛の自覚に立つ論理的思索によって自分の人間性を思想の真理をもって深めなければならぬ。真理愛はまた思想の自由の自覚を人々は促す。この自覚における思想の自由が、真理によってのみ可能であることを、大学の明徳館の正面入口の壁に掲げられた VERITAS LIBERABIT VOS という語句が我々に教えている。言うまでもなく真理は自由なる思索によって得られる。しかし自由に思索された思想が、すべて真理であるのではない。思想の自由の本質は、真理がこれ

を決定するのである。いや思想ばかりではない。一切の行動もまたそれが真理による、また真理への自由である時においてのみ、常に正しいのである。したがって学生の行動の一切は、常にこの自由の公式に基づいたものでなければならぬ。それ以外の行動はすべて暴力となる。暴力 (Gewalt) は真理や真実の敵である。

真理による自由の共同体としての同志社の精神と学风はこの語句によって最も深く規定されている。この語句は「ヨハネ福音書」の第八章にあるイエスの言葉であることから明白であるように、その主語である VERITAS は、イエス自身を象徴する宗教的真理であるが、これを論理的、概念的に換質・解釈することによって、真理概念の外延が広くなり、上記のように新しい論理学的意味を、そこから導きだすことができたのである。新島先生が横田安止宛ての書簡の終わりに、「小生畢生の目的は、自由教育自治教会両者併行国家万歳」と記された文章は、とりも直さずこの VERITAS LIBERABIT VOS の精神でもある。同志社に学ぶ者、教える者はすべて、この語句が告知する真理の自覚者でありたい。

四

学生に期待する第三のものは、「人情を教くする」キリスト教的愛の精神に生きることである。新島がこの人情という語にこめた意味は、人間に備わる自然的愛情といったものを越えて、キリスト教的道徳の原理をなすアガペーの感情であろう。「所謂良心を手腕に運用する人物」と言うのは、儒教主義的な理念に生きる人物のことではなく、アガペーの真理を同時に道徳的義務として

自覚しこの義務としての愛の道徳に生きる人物でなければならぬ。先生が徳富猪一郎に宛てて、「唯々我が良心を真理に照準して使用し、一生を終らんと欲するのみ」といわれた言葉は、このことを証していると思われる。新島もまたルソーと同じように、「神は善を愛するために良心を、善を知るために理性を、善を選ぶために自由を与え給うた。」(エミール)と考えたことであろう。

同志社はこのように、愛と良心に生きることを使命とする精神のもとに、教えそして学ぶ者たちの愛の共同体である。この愛の基体である同志社を愛することは、その象徴である新島先生を敬愛することであり、同時にその共同体の深みにおいて、自分自身を愛することである。このようにして初めて、学問的真理の探求という目的を媒介とした深く美しい愛に基づく人間関係が確立されることになる。同志社という美しき名をもつ多元的な目的共同体は、宗教と道徳と学芸を支配する三つの真理体系による全人的教育の理念を高く掲げ、学生の人間性から人格性への成長を期待する教学共同体なのである。

私が担当している「教育原理」の第一章に、VERITAS LIBE RABIT VOS という題目を掲げて試みてきたところのものは、同志社精神の本質と教育の原理についての、教育哲学的解釈であり、同時に私の考える同志社が期待する学生像を刻むことであった。しかしそれと共に、私は同志社が期待する教師像とは何か、ということを決えず反省せずにはいられないのである。同志社が期待する教師であることによって初めて、同志社が期待する学生像を刻みあげることができるのではないか、と言うことを考えつ

づけている私である。そこで自分の考えの独善を避けるためにも、学生が期待する「同志社の教師像」とは何か、と云うことを、学生諸君の口から聞き、教師としての使命に生きたく思うのである。
(文学部教授)

＊新島襄 研究参考図書

- | | |
|-------------------------|-----------|
| (1) My Younger Days | 同志社校友会 |
| (2) 新島先生書簡集 (森中章光編) | 同志社校友会 |
| (3) 続新島先生書簡集 (森中章光編) | 同志社校友会 |
| (4) 新島先生詳年譜 (森中章光編) | 同志社出版部 |
| (5) 新島襄書簡集 (同志社編) 岩波文庫 | 岩波書店 |
| (6) 新島襄先生 (徳富蘇峰著) | 同志社出版部 |
| (7) 新島襄一人と思想 (魚木忠一著) | 同志社出版部 |
| (8) 新島襄先生を偲ぶ (大塚節治著) | 同志社本部 |
| (9) 新島襄 (岡本清一著) | 同志社出版部 |
| (10) 新島襄片鱗集 (森中章光編) | 同志社出版部 |
| (11) 同志社九十年小史 (社史編集所編) | 同志社本部 |
| (12) 雑誌「新島研究」(新島研究会・季刊) | |
| (13) 新島襄 (渡辺実著) | 吉川弘文館 |
| (14) 新島先生略伝 (加藤延雄著) | 日本観光美術出版社 |
| (15) 新島先生と徳富蘇峰 (森中章光著) | 同志社 |

※比較の入手しやすいものに限りました。